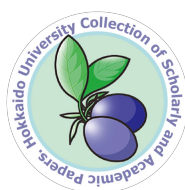




Title	タイ語の色彩語とその程度を表すオノマトペに関する考察
Author(s)	リーラワットワッタナー, ナットワラー
Citation	言語科学研究, 3, 19-35
Issue Date	2026-03-31
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.99125
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99125
Type	journal article
File Information	03_04.pdf



タイ語¹の色彩語とその程度を表す オノマトペに関する考察²

リーラワットワッタナー・ナットワラー

1. はじめに

タイ語には khăaw 「白」、dam 「黒」、dɛɛŋ 「赤」、lǔaŋ 「黄」、khǎaw 「緑」、fáa 「青」、nám-taan 「茶」、chomphuu 「桃」、sɛ̌et・sôm 「橙」、mǔaŋ 「紫」、thaw 「灰」、nám-nɔŋ 「紺」という 12 語の基本色彩語があり、Berlin & Kay (1969) の基本色彩語の進化過程仮説の第 7 段階まで進化していると Prasithrathsint (1995) によって述べられている。しかし、その 12 語の基本色彩語の中ではオノマトペに修飾され、その色彩の程度を表すことができるのは 7 語（白、黒、赤、黄、緑、桃、橙）しかない³。Berlin & Kay (1969) の進化過程仮説の第 1 段階から第 4 段階の色彩語はオノマトペと共起できるが、第 5 段階で青、第 6 段階で茶になると、それを修飾するオノマトペがみられなくなる。また、第 7 段階にある桃と橙にはそれらと共起できるオノマトペがあるが、同じ段階の他の色彩語は修飾できるオノマトペが見当たらない。しかし、なぜそれらのオノマトペが Berlin & Kay (1969) の基本色彩語の進化過程仮説に沿って順序正しく共起しないのか、なぜ色彩語ごとに修飾するオノマトペが異なるのかという理由については今まで問題にされてこなかった。

本稿の目的はタイ語における色彩語の程度を表すオノマトペの振る舞いを詳述し、上記の問題を明らかにすることである。本稿の構成は次のとおりである。2 節では、Berlin & Kay (1969) をはじめ、Kay (1975)、Wierzbicka (1990) など色彩語に関する研究 (2.1 節) や、タイ語における基本色彩語の先行研究 (2.2 節) を概観し、本稿で主に対象としている色彩の程度の強さを表すオノマトペ（以降、「色彩オノマトペ」と呼ぶ）を紹介する (2.3 節)。3.1 節でそれらのオノマトペをめぐる問題を確認した後、3.2 節で色彩オノマトペが Berlin & Kay (1969) や Kay (1975) の進化過程仮説に従わない理由をタイ語の基本色彩語の出現順序を参考にして検討を行い、3.3 節で色彩オノマトペではあるが他の色彩オノマトペと異なる性格を有するものを確認していく。4 節では、なぜタイ語において色彩オノマトペの種類が豊富なのかという問題に焦点を

¹ 本稿の「タイ語」は、標準タイ語のことを指す。

² 本稿は第 4 回北海道大学言語科学研究会での口頭発表の内容を基に、加筆・修正を加えたものである。本稿の執筆にあたり、指導教員として終始懇切なご指導を賜った野村益寛先生をはじめ、査読を担当してくださった 2 名の匿名査読者、また発表会において貴重なご指摘を賜った先生方々に心より感謝申し上げます。なお、本稿における不備・誤りは全て筆者の責任である。

³ 本稿で挙げられた用例 ((3) と (11) の例文を除く) は Thai National Corpus (Third Edition) (以降、TNC と呼ぶ) とネット掲示板から得られた。実際に用例を調査すると、青や紫、基本的でない色彩語を修飾する用例がみられるが、上記の色彩語と比べるとその数が非常に少なく誤用と考えられるため、ここでは 7 語の色彩語のみ言及することにする。なお、青や紫、基本的でない色彩語とオノマトペとの共起の用例の詳細については 3.3 節で述べる。

当て、理由を考える。5節では今後の課題及び本稿の結論を述べる。

2. 基本色彩語に関する先行研究と色彩オノマトペの紹介

タイ語の色彩の程度を表すオノマトペを考察するためには、「基本色彩語」という概念が非常に重要である。本節では、この概念を導入した Berlin & Kay (1969)、およびそれを修正、再解釈した Kay (1975) と Wierzbicka (1990) の考えを紹介した後、タイ語における基本色彩語の先行研究を確認する。また、2.3 節でタイ語の色彩オノマトペを紹介し、3 節での議論の準備とする。

2. 1 基本色彩語の先行研究

まず、Berlin & Kay (1969) の基本色彩語の進化過程仮説について簡単に紹介する。Berlin & Kay (1969) が 20 言語⁴を対象に各言語における色彩語の使用を調査した結果、色彩語の体系や派生順序を一般化し、(1) のように主張している。なお、(1) の a fixed partial order は、図 1 のような色彩語の出現順序のことを指しており、焦点色 (Foci) は図 1 のように一定の順序で進化しているという。

- (1) First, there exist universally for humans eleven basic perceptual color categories, which serve as the psychophysical referents of the eleven or fewer basic color terms in any language. Second, in the history of a given language, encoding of perceptual categories into basic color terms follows a fixed partial order. (Berlin & Kay 1969: 104)

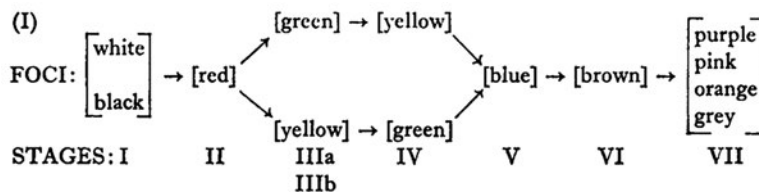


図 1. Berlin & Kay (1969) による基本色彩語の出現順序のモデル (Kay 1975: 257)

また、Berlin & Kay (1969) はある色彩語を基本色彩語とみなすために、(2) ①～④の基準を満たす必要があるとしている。しかし、それらの条件を達成しても疑わしい場合は (2) ⑤～⑧の付随的な基準を設定している。(2) の基準に基づき、彼らはタイ語には 10 語の基本色彩語がある (khă•w 「白」、dam 「黒」、dɛ•ŋ 「赤」、khǎw 「緑」、lǎŋ 「黄」、fá•² 「青」、nám•ta•n 「茶」、mûaŋ² 「紫」、chomphu• 「桃」、sàad 「橙」と述べている (Berlin & Kay 1969: 101)。

(2) Berlin & Kay (1969) によって提案された基本色彩語の選別基準

- ①その語の意味は二つ以上に分けることができず、単語彙素 (monolexemic) でできている。
- ②その語は他の色彩語の下位語ではない。

⁴ Berlin & Kay (1969) においてはタイ語を含む 20 言語が試験的に調査されており、加えて文献を基に 78 言語が検討されている。

- ③その語の修飾する対象は狭く限定されてはいけない。
 ④その語は母語話者にとって心理的に際立っている語である。
 ⑤その語が基本色彩語であれば他の基本色彩語と同様に一定の規則に則って派生語が付随する。
 ⑥他の物体を指す語ではない。
 ⑦近年に借用した外来語ではない。
 ⑧①を検討する際に、もしその語の語彙素を判断するのが難しいのであれば、その語の形態的な複雑さも視野に入れるべきである。

その後、Kay (1975) は Berlin & Kay (1969) によって提案された基本色彩語の出現順序のモデルを再検討し、図2のモデルのように修正を加えている。この修正は単に Berlin & Kay (1969) の第3～5段階にある緑、青⁵を見直しただけでなく、各段階での基本色彩語の範囲自体も変更したのである。例えば、Berlin & Kay (1969) が考えていた第1段階の色彩語は「白」と「黒」であり、それぞれの焦点色に当たる。それに対し、Kay (1975) は第1段階の「白」にその焦点色の他に、明るい色と赤や黄、桃などの暖色が含まれており、また「黒」の場合もその焦点色だけでなく、暗い色と冷色が含まれていると指摘している。

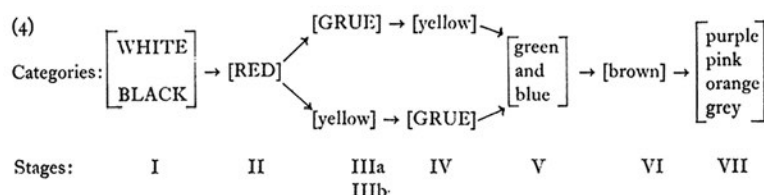


図2. Kay (1975) によって再提案された基本色彩語の出現順序のモデル (Kay 1975: 260)

Wierzbicka (1990) は Berlin & Kay (1969) の図1のモデルを再解釈した上で、図3のモデルを提案した。図3は Kay (1975) の色彩語の範囲に関する主張に近く、例えば第1段階にある macro-white には白の焦点色だけでなく暖色も含まれており、macro-black には黒に加えて冷色が含まれている。さらに、Wierzbicka (1990) が様々な言語の色彩語の意味や語源的な背景を分析し、色彩の概念は人間に共通する環境、自然現象に対する解釈に根ざしていると主張している。例えば、macro-white は光・昼という概念に基づいており、macro-black は暗さ・夜の概念に基づいているという。つまり、色彩の概念化は人間の経験によって動機づけられているのである。それぞれの色彩語の意味を理解するために、そのことばの conceptual prototype⁶を理解

⁵ 日本語の「青」ということばは「緑」より先に登場し、また「青」にも green と blue が含まれているため、図1のモデルとは整合しない。この点を踏まえて、Kay (1975) は図1を検討し、green と blue 両方の意味を兼ねた grue というカテゴリーを導入し、図2のように修正した (Kay 1975: 258-260)。

⁶ それについて Wierzbicka (1990) はハヌノオ語の“latuy”を例に挙げている。それが何色を指しているのか、英語の green や他の言語のことばを介しても正確に理解することができない。“latuy”は薄い緑、また緑・黄・淡い茶色が混ざった色であり、ハヌノオ母語話者が暮らす森の中でよく目にする色を指している (Wierzbicka 1990: 118-119)。このように、ある色彩語が何色を指し示しているのかを明確にするためには、それに根ざしている経験や文化を理解する必要があるのである。

リーラワットワッタナー・ナットワラー タイ語の色彩語とその程度を表すオノマトペに関する考察
 する必要があると Wierzbicka (1990) によって指摘されている。

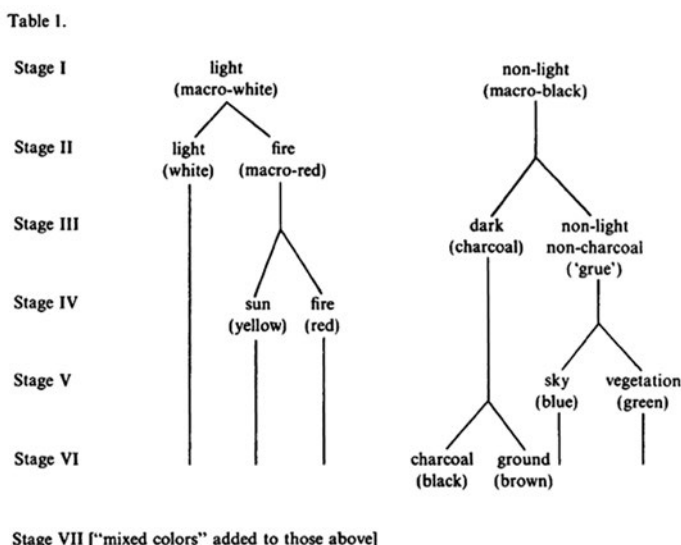


図3. Wierzbicka (1990) によって提唱された基本色彩語の出現順序のモデル (Wierzbicka 1990: 144)

2. 2 タイ語における基本色彩語の先行研究

タイ語の基本色彩語に関する研究としては Naksakul (1985)、Prasithrathsint (1995) の研究を取り上げたい。Naksakul (1985) は、タイ語の色彩語の多くがタイ母語話者の身近な自然に由来していると述べており、例えば thaw 「炭色」は thâw 「炭」から、fâa 「青」は fâa 「空」から派生されているという。そのため、Berlin & Kay (1969) の基本色彩語の基準 (2) ⑥に従えば、タイ語の基本色彩語は、khăaw 「白」、dam 「黒」、dɛɛŋ 「赤」、lǔaŋ 「黄」、khǎaw 「緑」、mǔaŋ 「紫」、sɛ̌et 「橙」という7語であり、つまり Berlin & Kay (1969) が主張したタイ語の基本色彩語の数 (10 語) より少なくなる。

Prasithrathsint (1995) はタイ標準語をはじめ、タイ各地域の方言、さらにタイ語と同語族であるチワン語を調査した結果、地域によって基本色彩語の数が異なっているが、標準タイ語の基本色彩語は12語あると主張している⁷。Prasithrathsint (1995) は、Berlin & Kay (1969) が示した基本色彩語の基準——とりわけ (2) ①と⑥——を再考する必要があると述べている。まず、(2) ①の単語彙素については、その語の形態的な構造より意味を重視すべきであると Prasi-

⁷ この12語の基本色彩語は Berlin & Kay (1969) に挙げられた基本色彩語に加え、thaw 「灰」と námgyŋ 「紺」が含まれる。また、橙色を表すことばは、Berlin & Kay (1969) と Naksakul (1985) の sɛ̌et ではなく、Prasithrathsint (1995) では sôm が用いられている。これは Prasithrathsint (1995) が調査を行っている際に、タイ標準語のインフォーマントが sôm を使用したためである。sɛ̌et と sôm はいずれも橙色を指しているが、Phornthippayaphanit (2014) によると、sôm は後に生まれたことばであり、当初 Dictionary of Siamese (1873) で「酸味」、「酸味のあるもの」として記述されていたが、初めて色彩語として収録されたのは Thai Royal Institute Dictionary (1982 Edition) である。

thrathsint (1995) によって指摘されている。námtaan「茶色」と námɣyn「紺色」は nám「水」と taan「サトウヤシ」や ɣyn「銀」との複合語として捉えられるかもしれないが、námtaan「茶色」は「サトウヤシの水」を意味せず、námɣyn「紺色」も「銀の水」を指しているのではない、また nám と taan や ɣyn を分解すれば、その意味（「茶色」、「紺色」）が失われる。そのため、Prasithrathsint (1995) では námtaan「茶色」と námɣyn「紺色」は (2) ①の基準に反しておらず、基本色彩語としてみなされている (p.133)。

また、(2) ⑥の基準については、その語がその他の物体を指す語に由来するものであっても、その色が他の色彩語と明確に区別されており、タイ語母語話者にとって際立って認識される色彩語であれば、基本色彩語とみなしてもよいとされている (Prasithrathsint 1995: 133-134)。例えば、タイ語の fáa「青」は fáa「空」に由来しているものの、他の色彩語と明確に区別されており、修飾された対象が狭く限定されていないため、基本色彩語として扱われているのである。

以上のタイ語の色彩語の研究をまとめると、表1のようになる。Berlin & Kay (1969) と Prasithrathsint (1995) は (2) の全ての基準を満たせず、とりわけ (2) ⑥の基準には問題があると考えられる。Naksakul (1985) は Berlin & Kay (1969) の基本色彩語の基準に厳密に従っているが、fáa「青」や chomphu「桃」など、Naksakul (1985) に挙げられなかった色彩語はタイ語母語話者にとって際立って認識されている ((2) ④の基準に相当する) ため、基本色彩語として認められていないのは納得し難い。そのため、Prasithrathsint (1995) に述べられた通り、(2) の他の基準を満たしていれば、(2) ⑥の基準を検討に入れなくても妥当であると考えられる。したがって、本稿ではタイ語における基本色彩語を Prasithrathsint (1995) と同じように、12語⁸とする。

	基本色彩語の数	基本色彩語
Berlin & Kay (1969)	10 語	白、黒、赤、緑、黄、青、茶、紫、桃、橙
Naksakul (1985)	7 語	白、黒、赤、緑、黄、紫、橙
Prasithrathsint (1995)	12 語	白、黒、赤、緑、黄、青、茶、紫、桃、橙、灰、紺

表1. Berlin & Kay (1969)、Naksakul (1985)、Prasithrathsint (1995) のタイ語における基本色彩語

2. 3 タイ語における色彩オノマトペ

Haas (1946) は、タイ語における程度強調の方法として、限定修飾語 (restricted modifier) と、強意の反復 (emphatic reduplication) の2種類を提示している。限定修飾語の特徴は、それらと共に起可能なことばの範囲が mâak「とても」など他の程度副詞と比べて、非常に制限されているということであり、例えば cāa のコロケーションは sawàan「明るい」に決まっており、sawàan「明るい」に cāa が後続すると、「すごく明るい」という意味になる。一方、hêɛŋ「乾いている」や jen「冷たい」などのことばは cāa と共に起することができない。また、それらと共に起するコロケーション、生起環境の間には何らかの関連性があると Haas (1946) によって指摘されており、例えば cāa と共に起できるのは sawàan「明るい」の他に dêt「日光」や dɛɛŋ「赤い」⁹で

⁸ ただし、同じ橙色を指す sɛɛt と sôm を一つの基本色彩語とみなす。

⁹ タイ語では太陽の色が赤として認識されている (Honghengseng 2020)。

ある。このように動詞¹⁰などに後続して、それらを修飾し、程度の強さを表す限定修飾語はタイ語に多くみられる。

隅田 (2011) が限定修飾語¹¹を調査した結果、59語のうちに53語が第4声調（高平調）または第5声調（上昇調）であり、顕著な偏りがみられる。隅田 (2011) は第4声調と第5声調が勢いの強さや程度の甚だしさとの間に音象徴的な関係をもっているため、擬態語としてみなしている。第4声調と第5声調はいずれも終点の基本周波数の値が高いという特徴を共通している。

隅田 (2011) の主張を裏付けているのは、Haas (1946) が示したもう一つの程度強調の方法である強意の反復である。声調まで似通っている完全反復語である非強意の反復 (non-emphatic reduplication) と異なり、強意の反復の場合は、繰り返された先行語を強意声調¹² (emphatic high tone) に置き換えることによって程度の大きさを強調することができる。(3b) でみられるように、反復することによって程度が弱まり (attenuation)、「高い」から「高い方」といった

¹⁰ 隅田 (2011) では「形容詞」と記述されているが、本稿では「動詞」と呼ぶことにする。タイ語の形容詞の位置づけに関してはこれまで多くの議論がなされてきた。タイ語では動詞と形容詞が形式的な違いがなく、統語上での振る舞いが酷似しているため形容詞は動詞の下位分類 (adjectival verb) とされている (Prasithrathsint 2000; 平地 2020 を参照)。

¹¹ 隅田 (2011) は Haas (1946) を引用しないものの、特定の動詞と限定的に結びつき、その動詞の程度を強調するものを「強勢語」と呼称している。一方、Haas (1946) に限定修飾語の例として挙げられた語と隅田 (2011) の強勢語の間には重なりがみられる。両者は程度副詞として機能し、共起範囲が限定されているという振る舞いが似ている。ただし、Haas の挙げた語は隅田 (2011) の強勢語のリストと完全に一致しているのではない。もっとも、隅田 (2011) のリストはアンケート調査から収集されたものであり、未収集の語が残っている可能性もある。そのため、本稿では隅田 (2011) の強勢語と Haas (1946) の限定修飾語を同じものとして扱うとする。

なお、全ての限定修飾語は擬態語として扱ってもよいのかはさらなる検討が必要である。例えば、本節で取り上げられた *câa* には /c/ が含まれており、象徴素であると考えられるが (4 節を参照)、Trongdee (2015) によると、*câa* は描写性が欠けているとされたため、Trongdee (2015) ではオノマトベとして扱われていない。一方で、描写性をオノマトベの判断基準とすることもあまり客観的とはいえず、また安定性に欠けている。例えば、*câa* と同様に (11a) の赤の程度を強調するラオス語の *cunghun* や (4) の *cúa?* は高い描写性をもつとされ、オノマトベとして扱われている (Trongdee 2015: 188)。また、「描写性」というオノマトベの意味的特性はオノマトベ範疇を定義するのに有用ではないと Hamano (1998) によって指摘されている。しかし、本稿で挙げられた色彩オノマトベは「オノマトベ」とであると隅田 (2011) や Trongdee (2015) で扱われており、全てはオノマトベの形態的な特徴をもっている (脚注 14 や Naksakul 1977 を参照)。

¹² 強意声調とは第4声調より基本周波数値が高い声調である。一般的には第4声調は 125hz から始まり、135~140hz まで上がり、130hz に終わる。それに対し、強意声調は基本周波数値が 130hz から始まり、150hz まで上昇し、135hz に終わる (Abramson 1962; Naksakul 1977)。なお、強意反復語の先行語は強意声調でなく、第4声調であるという見解がある (宮本 2010; 隅田 2011)。しかし、語幹が第4声調であっても、タイ語話者がその反復語が強意反復語 (声調に変更のある反復語) か、非強意反復語 (完全反復語) かを区別できるということは、第4声調とは異なる強意声調で発音されるということを示している。

控えめな意味に転じる。それに対し、(3c) の場合、先行語を強意声調¹³に変えることで、その高さの程度が強調される (intensification)。このことから、タイ語では高い声調と程度の大きさとの間に音象徴的な結びつきがあることが考えられる。

- (3) a. phûuchaaj khon nán sǔuŋ
男性 CLF その 高い
その男性は背が高い。
- b. phûuchaaj thîi sǔuŋ sǔuŋ khon nán khuu khraj
男性 REL 高い 高い CLF その COP 誰
その背が高い方の男性は誰だ。
- c. phûuchaaj khon nán sǔuŋ sǔuŋ
男性 CLF その 高い 高い
その男性は背がすごく高い。

タイ語では色彩語に動詞と同様にこれらのオノマトベが後続することによって、その色彩の程度を強調することができる。それらのオノマトベは表2のようになる。表2のオノマトベは隅田(2011)¹⁴を参考にしている。表2における○はその組み合わせが許容されているものであり、TNCやネット掲示板などを合わせて10件以上の用例が確認されることを示す。一方、??は容認度が低い表現であり用例が10件未満であることを示す。空欄は用例が見当たらず、許容されていないことを意味する。

表2で示されているように、これらのオノマトベはどの色彩語と結びつくか慣習的に決められており、(4)のようにオノマトベが色彩語に後続すると、その色彩語の程度を強調することができる。例えば、(4)では、khăaw「白」の後ろにオノマトベ cúa? と結びつくことで「すごく白い」、すなわち「真っ白」(白の焦点色らしさ)という意味になる。cúa? は khăaw「白」との組み合わせしか許容されず、他の色彩語と共起することができない。

- (4) krà?tàaj ják tua sǐkhăaw cúa? sǔam chútsùut sǐnámŋyn (PRNV066)
うさぎ 巨大 身 白 ONM 着る スーツ 紺色
真っ白な巨大なウサギが紺色のスーツを着ている。

3. 色彩オノマトベに関する問題とそれに対する考察

本節では、3.1で色彩オノマトベに関する問題点を2点提示した後、3.2節と3.3節でそれぞれの問題点に対する理由及び筆者の考察について論じる。

¹³ Hass (1946) では第4声調記号で強意声調を表しているが、(3c)での強意声調の表記はAbramson (1962)を倣っている。なお、Naksakul (1977)では声調を数字で表しており、⁵を強意声調としている。

¹⁴ 表2の中の céetcēē, prētēpēē, pítpīi は隅田(2011)に挙げられていないオノマトベであるが、これらはオノマトベの形態的な特徴を備えており、例えば第4声調や第5声調の符号が付与されていること(Hanpanich 1993: 121)や、頭子音/p/と第4声調や第5声調の符号との共起(Naksakul 1977: 120-121)が確認できる。また、TNCやネット掲示板でそれらと色彩語との共起の用例が多くみられるため、研究対象とした。

修飾を 受けた語 オノ マトベ	白 khāw	黒 dam	赤 dæŋ	黄 lǔaŋ	緑 khǎw	青 fāa	茶 námtaən	桃 chomphu	橙 sɛ̀t	橙 səm	紫 mǔaŋ	灰 thaw	紺 námŋyn	基本的 でない 色彩語	色 sǐ	色彩語以外
cǔoj				○												甘い
cúaʔ	○															透明
cɛ̀ɛ			○	??												日差し
cɛ̀t			○	○	○			○	○	○	??		??	??	○	
cɛ̀tɕɛ			○													行動、日差し
pítplī		○														塩辛い、苦い
plī		○			○											目を眩る、塩辛い、 苦い
pǔw		○			○											
pút		○			○											
pútɕpǔw		○														
prét・ pɛ̀t			○	○	○	??		○	○	○	??				○	酸っぱい
prɛ̀tɕɛ			○													
prɛ̀n・ prɛ̀n			○	○	○	??		○		○	??			??	○	
ʔɔj				○												
ʔī					○											(反感を表す) 感嘆 詞、動詞
ʔǔw					○											

表 2. タイ語における色彩オノマトベ

3. 1 色彩オノマトペに関する問題

本節では色彩オノマトペに関する問題点を二つ述べる。まず、色彩オノマトペと Berlin & Kay (1969) によって提案された基本色彩語の進化過程仮説との関係である。表2で示したように容認度の低いものを除くと、オノマトペによって色彩の程度を表すことができるのは7語(白、黒、赤、黄、緑、桃、橙)に限られている。2節で既に述べた通り、Berlin & Kay (1969) の基本色彩語の進化過程仮説は図1のような順序を想定しているが、タイ語の色彩オノマトペによる修飾はその順序に対応していない。Berlin & Kay (1969) の進化過程仮説の第1段階から第4段階に属する色彩語はオノマトペとの共起が確認できる一方、第5段階で青、第6段階で茶になると、それを修飾するオノマトペがみられなくなる¹⁵。また、第7段階にある桃と橙にはそれらと共起できるオノマトペはあるが、同じ段階に属する他の色彩語(紫、炭)を修飾できるオノマトペは見当たらない¹⁶。

一見すると、色彩オノマトペの共起は Kay (1975) のモデルに適合しているようにみえる(cf. 図2)。確かに Kay (1975) の考え方だと、桃と橙は第2段階の赤のカテゴリーに含まれているため、順序に問題がなさそうである。しかし、同じ grue のカテゴリーに含まれている緑や青のうち、緑のみが色彩オノマトペと共起する一方、青では容認されていないという点は Kay (1975) のモデルでも説明がつかない。このように、なぜ色彩オノマトペの共起が Berlin & Kay (1969) や Kay (1975) の進化過程仮説に沿って順序正しく現れないのか、その理由を3.2節で考えていきたい。

二つ目の問題点は一部の色彩オノマトペの振る舞いについてである。全ての色彩オノマトペが(4)と同様に一律に「(～)の焦点色らしさ」、「真～」を意味するとみなすことは妥当ではない。表2の右端で示した通り、一部のオノマトペは色彩語だけでなく、sǐi「色」単体とも結びつくことができる。(5)はその一例である。「色」だけでは特定の色を指しているのではないため、(4)と同様の解釈を適用するのは難しい。宮本(2010)は色彩オノマトペを含め、タイ語における色彩修飾語の意味について検討を行っており、céet が dɛɛŋ「赤」に後続する場合には「真っ赤」、sǐi「色」に後続するには「派手な色」と言及してはいるが、それ以上詳しく議論を深めていない。表2でみられるように、(容認度の低い紫や紺などを除いたとしても)黄や緑、桃、橙は céet とよく共起することが確認できる。しかし、それらが赤の場合と同じように「(～)の焦点色らしい」と捉えられるのかという点については踏まえていない。また、他にも prɛet・pɛet や、prɛen・prɛen も céet と同様の振る舞いをしているが、あまり問題にされていない。表2を考察すると、桃・橙(さらにあまり許容されていない青、紫など)と共起するオノマトペは全て上記のオノマトペ(céet, prɛet・pɛet, prɛen・prɛen)であることがわかる。そのため、これらのオノマトペは、色彩オノマトペによる修飾が Berlin & Kay (1969) や Kay (1975) の進化過程仮説に従わないことと関連している可能性があり、重要な手掛かりの一つであると考えられる。3.3節でこれらのオノマトペはどのような性格を有しているのか、他の色彩オノマトペとどのように異なっているのかを検討する。

¹⁵ TNC やネット掲示板を調査した結果、青と共起するオノマトペの用例がわずか1例しか確認されず、容認度が非常に低い。また、その用例を確認すると、そのオノマトペが(4)で示したような青の「焦点色らしさ」を表すものと解釈しがたい。詳細は3.3節で述べる。

¹⁶ 青の場合と同様にわずかの用例しかみられず、そのオノマトペが「焦点色らしさ」を意味すると考えにくい。詳細は3.3節で述べる。

- (5) mii kiitâa sǐi prǎen prǎen sɛ̀ɛp taa dèn dèn nɛ̀ʔnam
 もつ ギター 色 ONM ONM ヒリヒリ痛い 目 目立つ 目立つ 勧める
 mǎj khráp ɲóp mǎj kʰɯn hāmùun (https://pantip.com/topic/41960211)
 INT POL 予算 NEG 超える 五万
 目に刺さるような目立って派手な色をしたギターのおすすめはありますか。予算は5万
 バーツを超えない。

3. 2 オノマトベと色彩語の進化過程との関係性

では、なぜこのように Berlin & Kay (1969) の第1段階から第4段階までは色彩オノマトベが順序正しくなされているにもかかわらず、第5段階以降では順序の乱れが生じているであろうか。まず、Berlin & Kay (1969) や Kay (1975) の基本色彩語の進化過程仮説はタイ語における基本色彩語の出現順序に適合しているかどうかという点から検討を始めたい。

タイ語の基本色彩語の進化過程を検討した先行研究には、Engchuan (2000)、Tipkongka (2010)、Phornthippayaphanit (2014) がある。Engchuan (2000) がスコタイ時代 (1249 年～1438 年) の資料を調査した結果、当時代において確認できる基本色彩語は khǎaw 「白」、dam 「黒」、dɛɛŋ 「赤」、lǔaŋ 「黄」、khǎaw 「緑」という5語に限られている (p.59) ことがわかる。すなわち、当時代における進化過程は Berlin & Kay (1969) の仮説に対応し、第4段階に達しているといえる。また、タイ語の祖先であるタイ祖語 (Proto-Tai) を研究している Pittayaporn (2009) は、タイ祖語にも同様に白 (*xa:w^A)、黒 (*C₀.dam^A)、赤 (*C₀.dwɪŋ^A)、黄 (*hlwəŋ^A)、緑 (*xiəw^A) のみ存在していたと指摘している¹⁷。Engchuan (2000) によると、スコタイ時代の資料においては青や紺、紫は緑の範疇に一括りされており、橙や桃は赤の下位分類として扱われている¹⁸。このことから、Kay (1975) の図2のモデルのように、赤や緑は単にその焦点色を示しているのではなく、より広い範囲を包含していることがわかる。また、その出現順序については、Engchuan (2000) は Berlin & Kay (1969) と同じように「白・黒→赤→黄→緑」という順番をなしていると推定している。

しかし、アユタヤ時代 (1350 年～1767 年) における基本色彩語の出現順序は、Berlin & Kay (1969) に提案されたモデルに相容れない点があると Tipkongka (2010) によって指摘されている。Tipkongka (2010) によると、桃 (Berlin & Kay の第7段階目) が初出したのは1448 年～1483 年であり、橙 (Berlin & Kay の第7段階目) は1602 年～1627 年であり、青 (Berlin & Kay の第5段階目) と紫 (Berlin & Kay の第7段階目) は1732 年～1758 年である。また、ラタナコーシン時代 (1782 年～現在) に、炭 (Berlin & Kay の第7段階目) が初出したのは1797 年であり、紺は1805 年であり、茶 (Berlin & Kay の第6段階目) は1807 年であると Phornthippayaphanit (2014) によって報告されている。タイ語の基本色彩語の出現の順序は (6) の

¹⁷ Pittayaporn (2009) の研究では、タイ祖語には “gray” (*^hmoŋ^A) という語がある (p.342) と示されているが、それは他の色彩語と同じように色相 (hue) を指すのではなく、「くすんだ」という彩度 (saturation) を表していると考えられる。

¹⁸ 当時代の人々はそれらの色彩を物理的に別の色として識別できなかったわけではない。証拠としては『三界経』(trajphuummí?kà?thǎa; ไตรภูมิภค) が挙げられる。その中には仏陀から放たれた「六金色」の光明 (緑、黄、赤、白、橙、五色混合) が描写されている章があり、赤と橙が明確に別々の光として扱われている。ただし、文献においては橙は dɛɛŋʔɔ̀n 「薄い赤」として表現されている。

ように整理できる。(6) の下の括弧は Berlin & Kay (1969)、Kay (1975) の基本色彩語の進化過程における段階を表している。

(6) タイ語の色彩語の出現の順序のまとめ

白・黒 → 赤 → 黄 → 緑 → 桃 → 橙 → 青・紫 → 灰 → 紺 → 茶
 [1] [2] [3] [4] [7] [7] [5] [7] [7] [6]

前述の通り、色彩オノマトベと共に容認度が高いのは白、黒、赤、黄、緑、桃、橙の7語の基本色彩語であり、(6) でみられるように、いずれも比較的早い段階で出現した色彩語である。そのため、タイ語の色彩オノマトベによる修飾は(6)で示した順序に一致していると考えられる。しかし、問題点がまだ残っている。それは、chomphuu「桃」と sɛ̌et・sôm「橙」は白、黒、赤、黄、緑と異なり、出現が比較的遅い色彩語であるにもかかわらず、なぜそれらの色彩語と同じように色彩オノマトベによる修飾をとることができるのかということである。また、sɛ̌et「橙」を除き、タイ祖語から出現し、単に色彩そのものを指す色彩語(白、黒、赤、黄、緑)と異なり、chomphuu「桃」(chomphûu「ローズアップル」から)と sôm「橙」(sôm「オレンジの実」から)は他の物体から由来しており、つまり異なる性格をもっているのである。

3.1節で述べた通り、表2の考察から、桃・橙(また容認度の低い青、紫など)と共に起するオノマトベ(cɛ̌et, prɛ̌et・pɛ̌et, prɛ̌en・prɛ̌en)は他の色彩オノマトベと異なり、共通する特徴を有している。便宜的に、桃・橙を修飾するオノマトベを「色彩オノマトベII」と呼び、白、黒、赤、黄、緑と共に起するオノマトベを「色彩オノマトベI」と呼ぶとする。その点を踏まえて3.3節で議論を進める。

3.3 桃・橙と共に起するオノマトベの特徴

3.2節でタイ語における基本色彩語の出現順序を確認し、色彩オノマトベの修飾はその順序に適合していると考察できた。本節では、桃・橙と共に起するオノマトベを注目し、その振る舞いを検討する。桃・橙を修飾する色彩オノマトベIIは、cɛ̌et, prɛ̌et・pɛ̌et, prɛ̌en・prɛ̌enであり¹⁹、四つの共通した特徴をもっている。一つ目は、これらのオノマトベは色彩オノマトベIより広範に基本色彩語と共に起し得ることである。表2でみられるように、これら以外の色彩オノマトベIは基本色彩語とほぼ一対一の対応関係にあり²⁰、共に起の範囲は非常に限定的である。それに対し、ここで取り上げている色彩オノマトベIIは、桃と橙の他にも赤、黄、緑との共に起も容認度が高く、共に起の用例が多くみられる。また、あまり許容されていないものの、青や紫などとの共に起の用例がある。例えば、(7) のような例である。

(7) a. phâa mǎj sǐfâa prɛ̌et mii sɛ̌nlaj sǐltǔaŋ kôo waan púp
 布 シルク 青 ONM もつ 模様 黄色 PRTCL 置く ONM
 troŋnâa nǔu (PRNV018)

¹⁹ cɛ̌et, prɛ̌et・pɛ̌et は、chomphuu「桃」と sɛ̌et・sôm「橙」との共に起の用例は確認できるが、sɛ̌etに後続する prɛ̌en・prɛ̌en の用例は見当たらない。

²⁰ 一つの色彩語以上と共に起するオノマトベには、pǐi, pǔuui, pút があり、いずれも黒と緑のコロケーションである。4節で検討を行う。

真正面 私

すると、黄色い模様が入った派手な青のシルク布が私の目の前にパッと置かれた。

- b. mûaŋ péet péet céet céet bɛɛp mûaŋ mûaŋ kanlyɯjthiidiaw thɛɛmjan
紫 ONM ONM ONM ONM 系一感じ 紫 紫 まさに しかも
lâj sǐi thamhâj phôm raw duu dɛɛn sadùttaa
徐々に変わる 色 CAUS 髪 私達 見える 目立つ 目を引く

(<https://sistacafe.com/summaries/หัวม่วงเจดไหนดี้-ที่จะแซ่บเฟ้ออออ-id-617>)

派手な紫色で、まさに紫という感じ。しかもグラデーションをすることで、私達の髪を、目を引くほど目立っているように見えさせる。

二つ目は、色彩オノマトベ II は sǐi「色」に後続することができることである。具体的な例として (8a) が挙げられる。一方、色彩オノマトベ I は (8b) で示したように、sǐi「色」を修飾することは容認されない。(8b) の cɛɛ は通常 (8a) の céet と同様に赤に後続することができるにもかかわらず、この場合では置き換えることができず、非文になってしまう²¹。

- (8) a. weela paj phóp lûukkháa kǎw tǎw tɛɛŋtua hâj mǎʔsǎm
時 行く 会う お客様 PRTCL なければならない 身支度する CAUS 適切する
kâp sathǎanthîi mâj tɛɛŋ sǐi céet céet (NWCOL055)
と 場所 NEG 着る 色 ONM ONM
お客様に会いに行く時、場所にふさわしい服装をしないとイケない。派手な色の服を着ない。
- b. *weela paj phóp lûukkháa kǎw tǎw tɛɛŋtua hâj mǎʔsǎm kâp
sathǎanthîi mâj tɛɛŋ sǐi cɛɛ cɛɛ

三つ目は、これらのオノマトベは基本的でない色彩語と共起することができるということである。この特徴の用例は非常にわずかであり、誤用とも考えられるが、色彩オノマトベを調査した際にこの振る舞いが観察できたため、本稿において一つの特徴として取り上げることにした。ここでいう基本的でない色彩語とは、(9) のように、Berlin & Kay (1969) の基本色彩語の選別基準の (2) ①と②に反する色彩語である。

- (9) tɛɛ mâjchâj sǐi chomphu mûaŋ prɛɛn prɛɛn tàaŋtǎaŋ thîi dòot
しかし NEG 色 桃 紫 ONM ONM など REL 離れる
càak sǐi

²¹ これについて査読者の一人から大変興味深いコメントをいただいたのでここで紹介したい。それは、cɛɛ が céet のように sǐi「色」に後続することができない理由として、cɛɛ が céet の異形態である可能性が考えられるという指摘である。すなわち、dɛɛŋ「赤」は歯茎破裂音 d で始まる語であるため、céet から t (同じく歯茎破裂音) の脱落した cɛɛ が現れるという (また dɛɛŋ の他に、cɛɛ と共起可能な dɛɛt「日差し」も歯茎破裂音で始まる語である)。この点については、管見の限り先行研究では報告されておらず、また本稿のデータから十分に検証を行うことは難しいが、非常に示唆的であると考えられるため、今後の課題としてさらなる検討が必要である。

から 色

pàak thammachâat

(<https://pantip.com/topic/35127278>)

口 自然

しかし、自然な唇の色から離れた派手なパープルピンクなどではない。

以上の三つの特徴から、色彩オノマトペⅡは色彩オノマトペⅠと比べ、共起の許容範囲が広いといえる。これらの特徴は先行研究において未だ指摘されていない。

最後の特徴は、これらのオノマトペは色彩オノマトペⅠと異なり、色彩語を修飾してその色彩語の焦点色らしさを強調するのではなく、「派手さ」や「視覚的目立ち」を表すことができることである。3. 1節の(5)のような sū「色」に後続することで「派手な色」を意味する場合と同様に、特定の色彩語の場合においても「派手な(～)」を表現できる。色彩オノマトペⅡが現れた用例を検討すると、多くは鮮やかな蛍光色に近い色彩を描写する場合に用いられていることがわかる²²。例えば、(10a)はグアバの自然な色と異なる明るい緑色を表しているのであり、(10b)は目立って視認されやすい救命胴衣の橙色を描写しているのである。また、(7b)や(9)でも通常の状態(例えば、自然な髪色や、自然な唇の色)とは異なる色の鮮やかさが示されている。さらに、(9)のような基本的でない色彩語と共起できることから、その色の焦点色らしさを強調していないことを示唆していると考えられる。(もし桃の焦点色を表現するのであれば、(9)のように紫といった他の色彩語を言及しないはずである。)

- (10) a. fá?ràŋchêébúaj sàj sǐkhǎw céet nán kōw tōw
 グアバの梅漬け 入れる 緑色 ONM その PRTCL なければならない
 rawaŋ
 注意する
 khà? phrɔ? mājchāj sǐ thammachâat
 POL から NEG 色 自然

(<https://www.gotoknow.org/posts/359202?page=1>)

その派手な緑色(の着色料)が入っているグアバの梅漬けも、注意しなければなりません。自然からの色ではないのですから。

- b. khǎw bòk phrɔmkàp sōŋ sūachuuchīp sīsōm
 彼 言う 同時に 送る 救命胴衣 橙色
 péet lé? mùakní?rá?phaj sǐlūaŋ
 ONM と ヘルメット 黄色
 sòt maa hāj (PRNV074)
 強い 来る あげる
 彼は言って、派手なオレンジ色の救命胴衣と強い黄色のヘルメットを渡してきてくれた。

²² また、ネット掲示板で用例を調査した際に用例とともに掲載された画像を確認したところ、その色彩の焦点色(タイ標準語母語話者のそれぞれの色の焦点色への認識はJiang(2017)の調査を参照にしている)というよりも、蛍光色のような鮮やかな色が用いられていることがみられる。

このように、桃と橙は色彩オノマトベによって修飾を受けることが可能ではあるが、それらと共起する色彩オノマトベⅡは他とは異なり、比較的広い共起許容の範囲をもち、その派手さを強調している。桃と橙のコロケーションはこれらの色彩オノマトベのみに限られている。このことから、桃と橙は色彩オノマトベと共起できるにもかかわらず、単に色彩そのものを指す、タイ祖語から存在していた色彩語と性格が異なっていることがわかる。

ただし、色彩オノマトベⅡは必ず「派手」という意味を表すのかという疑問がまだ残っている。例えば、赤に後続する場合でも (7)～(10) と同様に「派手な赤」と解釈するのは妥当なのか、それともそれが「真っ赤」という赤の焦点色らしさを示しているのか判断するのが難しい。Wierzbicka (1990: 127) によって指摘されているように、赤その色自体は鮮やかな色であり、視認されやすい色であると述べているため、「真っ赤」と解釈してもよいと考えられる。

4. 色彩オノマトベと色彩の特徴との関係性

最後に、冒頭で取り上げた問題、なぜタイ語において色彩オノマトベの種類が豊富なのかという理由に触れておきたい。タイ語では色の焦点色らしさを示す「真～」や、色彩の鮮やかさを表す「派手な～」などといった一つの意味に対して複数のオノマトベがあるのは、それらの色彩オノマトベが異なったニュアンスをしており、存在意義があるためであると考えられる。表2の表で示されたように、色彩オノマトベには /c/、/p/、/pr/、/?/ という4種類の頭子音があるが、ここでは /c/、/p/ の分布に注目したい。その頭子音の分布は色彩オノマトベと共起する色彩の特徴に対応しており、つまり、隅田 (2011) に報告された声調と程度の甚だしさとの音象徴的な結びつきの他に、これらの頭子音にも色彩の特徴との音象徴的な対応関係があると考えられる。これは象徴素 (phonaestheme) の一つであると考えられる。

Wierzbicka (1990) によって指摘されているように、進化過程の第1段階には macro-white と macro-black が存在しており、それらは単に白や黒という個別の色を指しているのではなく、より広い範囲を包含している。macro-white の範囲は白の他に赤や黄などの暖色を、macro-black は黒のような暗い色や、青、緑などの冷色を含んでいる。また、色彩語には何らかの概念的基盤があり、macro-white は光・昼の概念に基づいているのに対し、macro-black は暗さや夜の概念に裏付けられているという。表2を考察すると、白、赤、黄といった macro-white の範囲に属する色彩語と共起する色彩オノマトベは、/c/ の頭子音をもつものが多い一方、黒、緑のような macro-black に属する色彩語とは、/p/ の頭子音をもつオノマトベが共起する傾向がみられる。

頭子音 /c/ の音象徴的な効果については、Saengkrachang (1973) の先行研究で言及されており、「まとまりのない、広がる様子」(p.17) を表しているという。これは、macro-white の概念的基盤である光が拡散している様子や、太陽が発光し光が多方向に広がっていく様子に類似していると考えられる。このように /c/ から始まるオノマトベと macro-white との共起は、タイ語だけでなく、同語族であるラオス語や、シャン語にもみられる (Trongdee 2015; Kiatyuddhajati 2021)。例えば、ラオス語は (11) のような例である²³。また、3.3 節で注目していた色彩オノマトベⅡの一つの *céet* は、特定の色の焦点色らしさでなく、蛍光色のような派手さを表していることも、/c/ が蛍光色のもつ高い可視性と音象徴的に関連しているのではないかと考えられる²⁴。

²³ 本稿のラオス語の IPA 記号は鈴木 (2004) を参考にしてている。

²⁴ また、ラオス語では macro-white の他にも、空の明るさを描写しているオノマトベも /c/ の頭子音を

- (11) a. thaanfáy dɛ̃ɛŋ cun̩khun̩ (Trongdee 2015: 188)
炭 赤い ONM
炭が真っ赤だ。
- b. lūat dɛ̃ɛŋ caaywaay (Trongdee 2015: 190)
血 赤い ONM
血が真っ赤だ。

一方、頭子音/p/と macro-black の音象徴的な関係性については、未だ先行研究で報告されていない。しかし、/p/の発音を見ると、上下の唇が一瞬閉鎖された状態で行われることがわかる。また、pīi, pítpīi, pūu, pūt, pūtpūu の母音は全て高母音であり、開口度合いが小さい。このような発音の仕方や口の形は、外部の光から遮断された密閉状態を連想させると考えられる。また、表2の右端でみられるように、pīi は黒や緑の他に、lāptaa「目を瞑る」や、khem「塩辛い」、khōm「苦い」と共起することがある。pīi が lāptaa「目を瞑る」に後続する場合は、目をぎゅっと強く閉じる様子を描写することができ、つまり唇の閉鎖が目の閉鎖に類似していると考えられる。また、khem「塩辛い」、khōm「苦い」の場合もオノマトペ pīi の修飾によって、「すごく塩辛い」「すごく苦い」という意味になり、その強すぎる味覚は眉間に皺を寄せ、目を細める表情と同時に起きている。そのような表情と口の閉鎖は暗さのイメージを喚起し、/p/と黒の音象徴的な対応関係を裏付けている。

既に3.3節で述べた通り、色彩オノマトペは基本色彩語とほぼ一対一の対応関係にあるが、表2でみられるように、黒と緑は多くの色彩オノマトペを共有していることがわかる。しかし、両方とも焦点色らしさを表しているわけではない。黒と結びつく場合は黒の焦点色らしさを強調しているのに対し、緑の場合は暗く濃い緑を表していると考えられる。例えば、(12)で挙げられた緑色は、その焦点色より濃い色をしていることが用例とともに掲載された画像で確認できた。

- (12) praakòtkaan thaleesàap sīkhīaw pīi sǎaràaj phŷym
現象 湖 緑色 ONM ワカメ 増加する
parimaan tham sàtnám taaj
量 CAUS 水生動物 死ぬ

(<https://highlight.kapook.com/view/123109>)

湖が濃い緑色になった現象。ワカメが増加したことで水生動物が死んだ。

このことから、pīi, pūu, pūt といったオノマトペは、前にくる色彩語によって色彩オノマトペ I とも、色彩オノマトペ II とも解釈することが可能である。なお、これらのオノマトペは色彩オノマトペ II の振る舞いと同様に sī「色」や、基本的でない色彩語と結びつくことはできない。しかし、3.3節で述べた赤の場合と同じように、赤と結びつくと「真っ赤」を意味する一方、他の色彩語と共起する場合には「派手な～」という鮮やかさを表す。

このように、タイ語において色彩オノマトペの単語が複数あるのは、それらと共起するオノマ

もっている。例えば、fāa (空) cēɛŋ (明るい) caaŋpaan (ONM) (Trongdee 2015: 190)。また、表2の右端でみられるように、/c/から始まるオノマトペ (cēɛ, céɛtcēɛ) は色彩語の他に、日差しを表すのに用いられる。

トベの特徴を喚起しているのである。頭子音/c/は macro-white に属する色彩がもつ発光性の性質と相性がいいのに対し、/p/は macro-black の暗さに対応していることがわかる。

5. 結論

本稿では、タイ語における色彩オノマトベの振る舞いを考察することによって、主に以下の三点を主張した。

- ①色彩オノマトベはタイ語における基本色彩語の出現順序に適合している。容認度が高く色彩オノマトベと共起できるのは、いずれも出現の早い基本色彩語（白、黒、赤、黄、緑、桃、橙）である。
- ②比較的出現順序の遅い桃と橙は、より早い段階で出現した色彩語と共起するオノマトベ（色彩オノマトベ I）と異なった振る舞いをするオノマトベ（色彩オノマトベ II）と結びつく。このことから、色彩オノマトベと共起可能な色彩語の中でも、オノマトベの種類に相違が存在していることがわかる。
- ③タイ語において色彩オノマトベの単語が豊富なのは、それらのことばを構成している音素がそれらと共起するそれぞれの色彩語の微細な特徴を表す象徴素として働いているからであると考えられる。

一方で、残された課題は多い。本稿では頭子音/c/と/p/に対応する色彩の関係を論じたが、他の子音（/pr/, /ʔ/）や母音とその色彩の特徴との音象徴的な結びつきについては検討を行っていない。また、宮本（2010）によって指摘されているように、色彩オノマトベには単にその程度を強調するだけでなく、話者の評価や感情などのニュアンスも含まれているため、例えば、同じ赤と共起するオノマトベはどのような場面で使用され、どのような意味合いを含意しているのかについて今後の詳細な分析が必要である。いずれも今後の課題としたい。

参考文献

- Abramson, A.S. (1962) *The Vowels and Tones of Standard Thai: Acoustical Measurements and Experiments*, Indiana University Research Center in Anthropology, Folklore, and Linguistics, Indiana.
- Berlin, B. & Kay, P. (1969) *Basic Color Terms: Their Universality and Evolution*. University of California Press, California.
- Engchuan, S. (2000) *Color Terms and the Concept of Color of the Thais in the Sukhothai Period and at the Present Time*. [Doctoral dissertation, Chulalongkorn University]. <http://doi.org/10.14457/CU.the.2000.222>
- Haas, M.R. (1946) Techniques of intensifying in Thai. *Word* 2, 126-130.
- Hamano, S. (1998) *The Sound-Symbolic System of Japanese*. CSLI Publications, Stanford.
- Hanpanich, S. (1993) *The Statistical Distribution of Consonants, Vowels and Tones within Thai Syllable Existing as Words and Word Constituents*. [Master's thesis, Chulalongkorn University]. <https://doi.org/10.58837/chula.the.1993.804>
- 平地祐章 (2020) 「タイ語の「形容詞」に関する一考察 ―名詞修飾節の観点から」『ユーラシア諸言語の類型論的記述』 11-19
- Honghengseeng, K. (2020) History of Ancient Thai Color Terms: A Case Study of Red Tone. *Academic Journal of Humanities and Social Sciences Burapha University* 28(3), 287-311.

- Jiang, Q. (2017) *A Comparison about Color Terms and Color Perception between Thai of Bangkok People and Chinese of Han People in Nanning*. [Master's thesis, Thammasat University]. https://digital.library.tu.ac.th/tu_dc/frontend/Info/item/dc:145337
- Kay, P. (1975) Synchronic Variability and Diachronic Change in Basic Color Terms. *Language in Society* 4(3), 257-270.
- Kiatyuddhajati, S. (2021) Color terms in Shan. *Ganesha Journal* 17(1), 69-82.
- 宮本マラシー (2010) 「タイ語における色彩修飾語の語彙意味の特徴」『大阪大学世界言語研究センター論集』4、55-78
- Naksakul, K. (1977) *Rabop Siang Phasa Thai*. Chulalongkorn University Press, Bangkok.
- Naksakul, K. (1985) Color names in Thai. *Journal of Thai Language and Literature* 2(1), 43-51.
- Phornthippayaphanit, T. (2014) *Color Terms in Thai during the Thonburi and Rattanakosin Period*. [Master's thesis, Kasetsart University]. <https://pirun.ku.ac.th/~fhumjvc/theses/thanatthakulphoall.pdf>
- Pittayaporn, P. (2009) *The Phonology of Proto-Tai* [Unpublished PhD dissertation]. Cornell University.
- Prasithrathsint, A. (1995) *Zhuang and Thai Color Terms and Color Perception*. Chulalongkorn University Press, Bangkok.
- Prasithrathsint, A. (2000) Adjectives as verbs in Thai. *Linguistic Typology* 4(2), 251-272.
- Saengkrachang, C. (1973) Phasa Chak Khwamrusuek. *Krong Phasa Lae Wannakam*, 13-31.
- 隅田敦子 (2011) 「オノマトベにみるタイ語の音象徴—声調に注目して—」『タイ研究』11、107-203
- 鈴木玲子 (2004) 「ラオス語」『言語情報学研究報告』4、79-93
- Tipkongka, W. (2010) *Color Terms in Thai in the Ayutthaya Period*. [Master's thesis, Kasetsart University]. https://doi.nrct.go.th/ListDoi/Download/104756?Resolve_DOI=10.14457/KU.the.2010.639
- Trongdee, T. (2015) Naewthang Kan Wikhro Kham Ideophone Nai Phasa Laos Thin. *Journal of Liberal Arts, Upon Ratchathani University* 11(2), 181-207.
- Wierzbicka, A. (1990) The meaning of color terms: Semantics, culture, and cognition. *Cognitive Linguistics* 1(1), 99-150.

(リーラワットワッタナー・ナットワラー・北海道大学言語科学研究室・修士課程)